モルトマンの聖書理解

笠井恵二

小論において私は、テュービンゲン大学を定年退職しつつも、統一を達成したドイツで今なお指導的立場において生産的な活躍をしつづけているユルゲン・モルトマン（一九二六年―　）の聖書観を明らかにしていきたいと思う。

一、希望の未来

まずモルトマンの神観をみてみよう。モルトマンによれば、イエスを死人の中からよみがえらせたのは、アブラハム、イサク、ヤコブの神、ヤハウェであり、またイエスにおいて顕わとなる神がいかなる神であるのかは、旧約聖書の神との差異と同一性からしてのみ明らかになる。またイエスはユダヤ人であり、イエスは誰であるか、また彼によっていかなる人間存在が顕わになるのかは、旧約聖書の律法と約束に対する彼の戦いから明らかとなる。この出発点から、神学的認識の道は不可逆的に、特殊なものから一般的なものへ、歴史的なものから終末論的・普遍的なものへと向かっていくのである。

イエスにおいて自己を啓示する神は、旧約聖書の神、出エジプトと約束の神であり、「存在の特性としての未来」をもつ神であるから、ギリシア的な神と同一視されるべきものではないことをモルトマンは強調する。神が誰であるかは、全体としての世界が告げるのではなく、イスラエルの約束の歴史が語る。神の特性は地上的なもの、人間的なもの、死すべきものの領域を否定することによって言いあらわすことのできるようなものではなく、神の約束の歴史を想起し説明することによってのみ表現され得るのである。しかし、この神はイエス・キリストにおいて全人類の神として自己を啓示されたのであり、道は具体的なものから普遍的な具体的なものへと進んでいくのである。

またモルトマンによれば、福音は救済史に先立つ歴史の成就として理解されなければならない。キリストの出来事は一つの孤立した事柄として受取られてはならない。福音は、その普遍的・終末論的な救済の意味において理解されなければならず、そのためには、それによって成就がもたらされる歴史の証言を必要とするのである。旧約聖書の証言に即してのみ、福音はキリストの出来事を神の選びの歴史の成就として実証するのである。すなわち旧約的な救済の出来事は、キリストの出来事を理解するための導きとなるように起こるのである。そのひとつの例としてモルトマンは、パウロがアブラハムの約束を普遍的・終末論的地平へと移したことを挙げる。

そして神の約束は福音において実現したのであるから、旧約聖書は約束の歴史を証言することにおいて新約聖書において成就され、新しくされるのである。旧約聖書において多様な形で証言されているアブラハムの約束と、新約聖書で証言されているキリストの福音の間には、ひとつの言葉の歴史、ひとつの伝承の歴史、伝承された希望の作用の歴史が起こる。そしてこの言葉および伝承の歴史は、告知され約束された未来によって規定されている。だからパウロは、旧約聖書の中に福音との連続性を見出すのであり、その連続性の意味と目標を現在的希望の中に見るのである

（ローマ一五章四節）。「……『それゆえわれわれに対しこれまでに書かれた』聖書が示すところのものは、可能性と未来を含むのであり、それらに向かって現在の希望は自らを備えることができるのである。それゆえ、『これまでに』書かれたものの解釈と現在化は、その中で約束されたもの、聞かれたもの、完結していないもの、未来を指示するものに注意しなければならない」。[1]

さらにモルトマンによれば、新約聖書の復活日のテキストは、歴史を説明しつつ宣教し、宣教しつつ説明している。これらを「史実的資料」として読むべきか、それとも「ケリュグマ的な決断への呼びかけ」として読むべきかと選択をせまることは、テキストが求めていることではない。大切なことは、これらの伝承を形成したのは記録係ではなく伝道者であったという様式史的研究の認識が、この宣教を生んだ伝承に対する史実的問いの意図と結合されることである。もしイエスの復活の現実がただ伝道的宣教という仕方で伝えられているのなら、それを伝達に至らせた内的な迫りは、出来事そのものの独自性に基礎をもっている。宣教される事柄の背後にひそむ現実は、すべての民族に対する宣教を求めている。なぜあのように語られ、何が宣教へと強要したのかを問うていくなら、人は新しい道の上にいるのである。「……問題はもはや、この宣教が『史実的』意味において正しいかではなく、宣教が、それが語る出来事によって正当とされるか、また必然的に生かされるか、またそれはいかにしてか、である。それゆえ昔の過去的なものが単に史実的に問われたり、単に現在的語りかけが実存論的に解釈されたりするのみならず、この出来事が告知するところの開かれているもの、完結していないもの、処理されていないもの、未だ残っているもの、総じて未来が問われなければならないのである」。[2] もしこの出来事の中に未来に向かうものが潜んでいるなら、それは「想起しつつある希望」という形においてのみ語られるのである。イエスの復活の出来事が、その普遍的・終末論的未来との関わ

りで理解されるなら、この出来事に呼応する伝達の形態は、すべての民族に対する宣教でなければならない。それが、この終末論的出来事が約束する未来のために、真に奉仕するものなのである。

二、創造における神

ここで、聖書の冒頭におかれている神の創造の物語についてモルトマンがどのように考えているかを見ておこう。モルトマンによればあの創造物語は、旧・新約聖書の他の諸書と同様に、さまざまな歴史的時代に由来するものであり、物語そのものが創造信仰と自然認識の総合を表現しているのである。もし人が、聖書の証言によって特定の自然認識が承認されるのだから、それ以上探究する必要はないと考えるなら、それは聖書主義的な誤解である。聖書の伝承の歴史は、創造物語自体が新しい経験による修正という解釈学的過程の中にある。創造物語は、世界と共にある神の歴史の証言であり、この神の歴史における世界の新しい経験を導くことによって、この経験に対する新しい解釈を示している。だから、創造に関する聖書の証言を新たな自然認識、およびこれを解釈するための新しい理論と関わらせ、聖書の証言そのものを新しい自然認識と理論において定式化することが必要である。「創造信仰と自然認識のつねに新たな総合のための開放性は、聖書の証言そのものが将来へと開かれていることにおいて基礎づけられている。もちろん、この将来への開放性は、おのおのの総合を暫定的構想とし、決して独断的主張を許さない」[3]。

このようにモルトマンは、聖書をそのまま歴史的事実としてとらえる「聖書主義的立場」を批判し、聖書自体が、それぞれの時代、それぞれの人々によって常に新しく解釈されることを要求していると考えるのである。その意味で

聖書はすべての人に語りかける生ける神の言葉だということであろう。そのためモルトマンは「聖書的伝統」という言葉を好んで用いるのである。聖書のテキストが伝承史的関連からきりはなされ、他の関心を認めるために使用されるなら、そこには誤解が生じてくる。創世記二章一五節を見ると、人間が「耕し守る」べき「エデンの園」について語られているが、ここで人間がなすべき地上の支配ということは、庭師の仕事のようなものであって、乱用や搾取がゆるされているわけではない。なるほど現代文明を形造る増大と進歩への意志は、聖書の創造論の助けによって認められてはきたが、それは決して聖書の中に根拠をもつものではないとモルトマンは主張する。

そしてモルトマンは聖書を読むとき、その一部分を自分の都合のよいように読むのでなく、聖書全体との関わりにおいて読むべきことを勧める。「……聖書的創造論にとっては、創世記一、二章だけではなく、聖書の証言全体が引き合いに出されねばならない。ここでわれわれは、『聖書的』という表現によって根本主義的ということではなく、『ユダヤ＝キリスト教的』ということを意味している。キリスト教的創造論の出発点は、キリストの福音の光りに照らされて、聖書の創造物語を解釈することでしかありえない。だから、キリスト教的創造論は聖書主義的ではありえない。旧・新約聖書の聖書的伝承において、被造世界としての世界の経験は、イスラエルの歴史の中に創造の神が啓示されているという信仰によって、決定される」のである。[4]

三、聖書の釈義と説教

モルトマンにおいて聖書は証言であり、それを教会が宣教していくことに意味がある。だから彼は、聖書そのもの

が絶対的に無謬であるという聖書主義の立場には批判的なのである。そしてモルトマンは、聖書の歴史的釈義と神学的釈義との分裂のために生じてきた近代の解釈学的考察について言及する。福音を歴史的資料として読むか、それとも宣教的決断への招きとして聴くかという二者択一は、福音を真に理解していない態度である。福音の意図するところは、資料でも決断への招きでもない。それは宣教しつつ語り、語りつつ宣教しているのである。すべて新約聖書の発言は、証言、宣教、および具体的な呼びかけとして、ただ一回的な状況の中にある。そして聖書的宣教の特質は、それが語られ聴かれた歴史的状況をこえて普遍的なものへと進んでいくことにある。聖書は当時の時代的状況と一体をなしているだけでなく、未来に横たわる普遍的人間の状況と一体となることを求めている。だから、聖書の発言を異なった時代に翻訳していくことが必要とされるのである。宣教が具体的な実存的真理を語るとき、その発言は普遍的真理を含んでいるのであり、これが「ただ一回限り」ということのもつ意味である。それは「歴史的な一回性、所与性、逆もどり不可能から、終末論的、普遍的拘束性への転回であって、その際、イエスの一回的な歴史がその光の中で語られるあの黙示録的終末観は、その普遍的・一般的拘束性の最初の表現をあらわしている」のである。[5]

そしてモルトマンは、聖書本文の釈義は宣教の必然に迫られるとき、その目標に達すると言う。釈義とは、何故説教されねばならぬかという問いに答えるものでなければならない。神の御言葉自体が、その証しする内容を告げひろめるべきことを迫るのである。「説教に対する権威づけは、証しする内容から聖句を通して起こるか、さもなくば、全然起こらないかいずれかである」。[6] 今日、釈義と宣教が分離してしまっている。それは、いかにして聖句から説教に達するかということの考察はなされても、何故この聖句から説教が出てこなければならないのか、ということが問われないからである。釈義から迫られて説教がなされるときにのみ、説教に意図的な技巧がなされたり、説教者がその

折々の内的状況に規定されることなく、説教が御言葉に規定されるのである。だから説教を準備するにあたっては、釈義から説教への途上で「いかに」という問い以上に、「何故に」と問うていかねばならないのである。さらにモルトマンによれば、「新約聖書においてパウロは、福音を主の啓示によってもっているゆえに、その福音はまた異邦人の中に主を啓示する働きをなすと言っている。したがってただ単に伝承された報道や、終末論的瞬間における語りかけにとどまらない。むしろこの世に対するキリストの支配と栄化が、歴史的に行われる過程の中での推進させる力である。したがって福音・伝道・イエス・キリストの現われは、キリストの啓示という同一線上にある。……つまり福音が十字架の言葉であるならば、イエスの甦えりにおけるその言葉の出来事は、現在をして未来に向かって打ち開かしめ、現在を希望の時、変革を期待する変化の時とし、未来を現在の力たらしめる」のである。[7]

このようにモルトマンにおいて説教とは、ただ聞き手に真理を伝えようとするだけではなく、人間と世界の未来を現在にもたらそうとするものである。そして御言葉の出来事とは、御言葉が出来事となることだけでなく、御言葉が約束していることが出来事となることなのである。この約束の成就の出来事が、歴史の中ではキリストの十字架とキリストの苦難にあずかることにのみ場所をもつことにおいて、それはユートピア的なものであるとモルトマンは言う。

四、解放の言語

モルトマンは、人間は問題のある生活の中で希望を学ぶために聖書を読むと言う。聖書には、無からの創造、アブ

ラハムの出立、エジプト脱出、イエスの死からの甦えり、弟子たちの派遣などが書かれているが、これらは何のために聖書に記され、語られ、説教されているのかと彼は問う。そしてそれの答えとして、パウロの「これまで書かれた事柄は、すべて聖書の与える忍耐と慰めとによって、望みをいだかせるために書かれたのである」という言葉を引用する。聖書が語る神の約束において、人々は希望と忍耐を学ぶのである。彼らは、神の歴史を待ち望みつつそれに向かって進んで行く。「聖書は希望を教える教科書である。そして、この希望を正しく理解する最上の前提は、今日の神学と教会が、あらゆる面、あらゆる言葉を『私は何を望むことが許されているか』という燃ゆるような問いかけをもって、考慮してゆく、そのことにほかならない」[8]。

そしてモルトマンによれば、キリスト教的に語ることは聖書の言語から学ぶことである。キリスト教信仰において、礼拝・集会・祈り・聖歌・倫理が、聖書の証言の現在化によって生きるということが、基本なのである。そして聖書の証言は、一定の歴史を証言するものである。すなわちそれはイスラエルの歴史、イエスの歴史、および初代キリスト教の歴史に関する証言である。それはこのような一定の歴史の報告であると共に、この歴史が神の歴史であることを証言している。それは歴史を語りながら、神によって起こり行なわれた約束を宣べ伝える。それが物語る歴史は、過去の中にとじ込められたような歴史ではない。そうでなければ、この歴史を神の歴史として宣べ伝えることはできない。これが宣べ伝える約束は、単なる理念的な語りかけではなく、歴史の中に行なわれたものである。聖書的証言は神の約束の歴史を証ししているのである。この約束が人間の希望と失望との歴史を形成してきたのであるから、人間の歴史は約束の性格をもっている。約束の歴史は行なわれた歴史であり、それは未来に開かれているのである。

モルトマンはイスラエル民族の歴史は、旧約聖書の父祖たちの歴史、すなわちアブラハムが彼の故郷や友人や偶像

の世界から脱出し、彼によって地上の諸民族を祝福される神の約束から始まっていることを指摘する。イスラエルの歴史というのは、いわばすべての民族が自分たちの故郷から、あるいは捕囚状態からのたえざる脱出を示すものであり、イスラエルによってすべての民族が主の平和に達するあの未来を目指していくのである。だから、旧約聖書のテキストそのものが途上の性格をもっているのである。それは過去を語ってはいるが、実は未来を宣べ伝え、現在の鎖が断ち切られることを宣べ伝えているのである。それは読む者が固定化された現在に疑問をいだき、神の新しい未来の経験に招かれるために、しばしばテキストのただ中で中断される。このため、このテキストは歴史的テキストと呼ばれるべきであり、それは新しい歴史を開示する。それは解放と神の未来へと帰還すべきことを語っている。「それは永遠の真理を地上的に言語にうつすような聖なるテキストではない。むしろ、神の歴史的真実（神の真理）を証し、この真実に信頼する勇気をつくるテキストである。それは閉じられた自己満足した聖なる書物ではなく、むしろ――望むがゆえに神の歴史を想起し、神の真実の歴史を想起するがゆえに来たるべき神を望む――信仰における生のさらに続くドラマを書きしるしたもののような働きをする」。[9] またモルトマンは、新約聖書はいっそう新しい仕方で解放の言語を語ると主張する。それはイエスという名をもった、人となった神の約束の生と死の歴史を証ししているのである。福音書や書簡は、このナザレからでた人物の歴史が、近づきつつある神の国の歴史、圧迫されている人間を自由にする歴史として証しされていることを明らかにしている。イエスは預言者たちのように、すべての約束が成就されるべき遠い神の国を宣べ伝えたのではない。イエスは罪人たちと解放の言語を語り、しるしや奇跡によって救いなき者に対する救いを先取りし、不義なる者たちと神の喜びの食事を祝いつつ、その時代の苦悩のうちにある人々のただ中で生きたのである。だからパウロは、神の約束はすべて彼において「然り、アーメン」となったと言っているの

である。

またモルトマンによれば、神の国が十字架につけられたキリストにおいて現在化するという歴史を伝える新約聖書のテキストは、「自らに閉じられた教理の完結したテキスト」ではなく、「途上の性格を帯びた歴史的テキスト」である。さらにその先を聞きたいところで物語は中断する。それは歴史そのものがさらに進み続けるという要求をもって中断する。それはナザレから来た人物の歴史を宣べ伝えるから歴史的証言であり、それは人々に新しい歴史、すなわち信仰にある自由の歴史を喚起するから歴史的宣教である。しかし、このテキストの中心にイエスの十字架の死の歴史、イエスの神の自由への甦りの宣教が立っているのであるから、それは歴史の中で人間の裁量によって可能な一切のものを越えて進んでいく。それはこの中心において、歴史そのものに対する神の可能性を言いあらわしている。そしてイエスの死を神の歴史として宣べ伝えることは、この死の中に神の存在そのものが宣べ伝えられていることを意味するのである。未来をイエスの甦りとして宣べ伝えることは生の勝利を宣べ伝えることであり、それは死からの解放、個人的・政治的生の罪責の中にある力からの解放を語るものである。新約聖書はイエスとその歴史について語っているが、彼の終わりによって新しい始まりを、彼の死によって御国の未来を宣べ伝えているのである。つまり新約聖書は、イエスを想起することによる希望の書であり、神の喜びにおける世界の解放の希望をあたえるのである。「これを要約するならば、聖書の言語は人間の解放の言語であると言うことができよう。聖書は束縛された者・抑圧された者・不義なる者・権利をもたぬ者のところにくる、神の約束の歴史を語っている。それは過ぎ去った歴史の物語でありつつ、神の来たるべき歴史の約束の書物である。それは書物としては、神の喜びと人間の自由のドラマの記述である」[10]。

さらにモルトマンは、聖書の言語はその内容からのみ理解されると言う。聖書の言語は聖なる言語として硬直したものとされるべきではなく、歴史の新しい状況において、生きた解放することばを目指すべきである。解放の言語は聖なる伝統の言語として硬直化されてはならないのである。聖書の言語が解放の言語であるなら、それは新しい状況において解放する新しい語りかけを目指すのである。もし聖書が解放の言語を語るものなら、聖書の権威や機能は、律法や支配の形において主張されるべきではなく、福音と自由の形においてのみ理解されるのである。「過去と未来に対する根本的な問いは、人びとが聖書の権威を律法的に理解するか、福音的に理解するか、その言語を支配の言語と理解するか、解放の言語として理解するかにかかっている」[11]。このようにモルトマンは、聖書は人間を真に解放する言語を語るものであることを強く主張しているわけである。

五、近代の神学

モルトマンは、キリスト教信仰の宣教の実存論的解釈は、この宣教の政治的解釈をめぐって拡げられたと言う。政治的解釈学と社会史的釈義は、聖書の神話的世界像には当時の世界理解と自己理解が表現されているのみでなく、社会的紛争と政治的権力闘争も反映しているという事実から出発している。聖書の伝承は、預言的約束と神の福音の「政治的宗教」との対決を示している。モルトマンによれば旧約聖書のすべての伝承は、エジプトの奴隷状態からイスラエルが脱出したことから出発しており、宗教＝政治的解放の経験に根ざし、過越祭によってくり返し現在化されてきたのである。新約聖書のすべての伝承は、十字架につけられたキリストが神によって復活したことに拠っている。

それは実際に経験され、終末論的に待望された解放の使信なのである。だから宣教は、今日においても実際の政治的世界と批判的＝解放的にかかわり合っており、敬虔な市民の私事に限定されるべきではない。「社会的および政治的解釈学は、近代世界の『市民宗教』の限界と圧迫から人間を解放する酵素を、教会のうちに見る。それは聖書を、非人間的暴力と神から離れた諸勢力のはびこるこの世において『転覆をもたらす』『革命的書物』と理解している」(12)。

だからモルトマンは、「解放の神学」に深い理解を示している。彼は、キリスト教神学が、貧しい人々のためのイエスの神の国の福音において教会の現実存在を反省するなら、当然、社会と教会に対して批判的にならざるを得ないと考える。つまりそれは、世界を変革しようと欲しないわけにはいかない。抑圧された者の解放へと向かうのは、それの内的必然性なのである。ラテン・アメリカの貧しい抑圧された人々においては神学は、徹底して福音の光における実践を批判的に反省することである。批判的神学は民衆の生活の中に教会の位置を発見しようとする。だから教会は抑圧する支配者の立場に立つのではなく、貧しい者を解放する力とならなければならない。

そしてモルトマンによれば、中世の神学は「愛の神学」だった。そしてルター、ツヴィングリ、カルヴァンらの宗教改革者の神学は「信仰の神学」だった。しかし近代における問題の中心は、未来に関する問いにある。だから、近代のキリスト教神学は「未来の神学」でなければならない。そして未来の希望への問いに答えるには、キリスト教神学は終末論から構想されなければならない。このようにしてこそ、現在を批判し変容することが可能になるのである。

モルトマンは、キリスト教信仰の起源の文書を歴史的・批判的に研究するものとしての聖書学はプロテスタント神学においては、百年前から為されていたと言う。そしてこれの中心的な問題は、カトリックのような聖書と教会の伝統の関係ではなく、キリストと聖書との関係だった。聖書の歴史的批判的研究はライマールス以来、イエス自身を知

り、イエスを実際あったままに理解しようとする関心に導かれていった。イエスの生涯に関する史的探究は、彼をキリスト・ドグマから解放し、信仰を教義から解放させたのである。「……結局、イエスの生涯の史的研究は、教会のキリスト教宣教に対する人間主義的選択に到らずに、この宣教をその起源と内的真理基準へと立ち帰らせたのである。すなわち、宣教されたキリストはナザレのイエスである。『キリスト教的』なものとして妥当すべきものは、したがってイエス自身とその使信において明らかとならねばならない。他の誰でもなくイエス自身が、すべてのキリスト教神学の起源としてまた原理でもある。彼はもろもろの霊を区別する基準である。彼は『正典中の正典』であり、新約聖書の内的区別原理である。福音主義の聖書学がこの原理に従うにつれて、また宗教改革のスローガンである『聖書のみ』を真にキリスト教的原理である『キリストのみ』の外的表明と理解するにつれてますます、この聖書学はカトリックの聖書学に、そして始まったばかりの正教の聖書学に影響を及ぼし、自ずとエキュメニカルになったのである」[13]。そしてさらにモルトマンによれば、この聖書の再発見は人々に旧約聖書の意義を強く認識させたのである。

六、旧約聖書の意義

モルトマンは、歴史的に見れば、キリスト教はユダヤ教の中から生まれてきたものであり、新約聖書は旧約聖書を前提にしていることを指摘する。しかし、シュライエルマッハーからハルナックに至るまで、自由主義プロテスタンティズムにおいて、旧約聖書は長い間疎遠なものとされてきた。しかし今や教会と神学は、旧約聖書に対する新しい関係において改新されている。新約聖書に対する旧約聖書の構成的な意義が発見され、ユダヤ人であったイエスがわ

れわれに「父」として呼びかけるように示された神は、アブラハム、イサク、ヤコブの神であることが理解された。永い反ユダヤ主義の歴史を経て、今やイスラエルとキリスト教界は兄弟のように同じものに属していることが理解されたのである。ここでモルトマンは、ゲーアハルト・フォン・ラート（一九〇一年―一九七一年）が旧約聖書の意義を、目のあたりに見るように描きつつ再話しているところに見たことを評価する。彼の歴史と物語の意味に関する旧約聖書的洞察は、キリスト教神学が伝統的にヘレニズム的にロゴス化されたことに疑問を呈し、その抽象化を正した。集団的な歴史経験は、概念によっては解体されてしまうが、「物語」によって保持され伝達されるのである。「キリスト教神学は、そこに、物語神学としての己れの固有の性格を発見した。旧約聖書的に形造られたキリスト教神学は、希望の経験とこの世が未だ救われていないということの経験を感受し始めた。旧約聖書において、キリスト教信仰は再び現実主義的に、政治的に、肉体的になり、『神と魂』へのグノーシス的固着を放棄した。福音主義であれ、カトリックであれ、大部分の神学の体系上の新しい手がかりは、この旧約聖書の発見の中に基礎を持っている」[14]。

この旧約聖書の発見により、キリスト者とユダヤ人の親縁性が知られるに至った。しかしこの発見に至るためには、キリスト教徒によるユダヤ人迫害の永い歴史があったのである。キリスト教がローマ帝国の国教になった時、反ユダヤ的法律が成立した。しかし教会やキリスト教的帝国が自己の不完全さに対して嫌悪を抱いたとき、キリスト教のユダヤ人憎悪が生じてしまったのである。

そしてモルトマンは、キリスト教はすでに早い時期から旧約聖書の影響を脱して、ギリシア宗教とローマ哲学の影響によって新しい世界宗教となっていったと言う。ところがこのギリシア哲学の神は、無時間的で永遠の最高存在であり、地上の運命に動揺することがなく、過ぎ行くことのない天上の世界の総体だった。このようなギリシア的なも

のの影響を受けてきたこれまでのキリスト教信仰の形態が、今や終わりに近づいてきている。今日は、この重要な過渡期なのである。今や一種の「旧約ブームの波」が押し寄せている。「ほぼ三〇年来、人々はキリスト教信仰にとって旧約聖書のもつ永続的で将来を指示する意味を発見しつつある。人々は旧約聖書なしに新約聖書を読むことができず、両者とも相並んで、また一緒になってはじめて、信仰による充実した人生が開かれる、ということを理解しつつある」[15]。今や、ナザレのイエスはキリスト者とユダヤ人を分離せしめるものではなく、むしろ旧約聖書の希望と神の国における世界の将来とが非ユダヤ人にまで及ぶ橋であることが発見されている。また今や、キリストにおいて啓示された神はギリシア哲学の最高存在や、宇宙万有を動かす第一動者とは関係がなく、むしろイスラエルと予言者の神と同一であることが発見されつつある。「このことによって、われわれは神概念における根底的な変化に直面している。信仰と希望との間のあの近代における分裂を克服し乗り越えることのできるキリスト教信仰の革命が、旧約聖書から起こるのである」[16]。

このようにモルトマンは、新約聖書の中にこの旧約聖書の神に対応する神の理解を見出すことができることを強調している。イエスが人々の前に現われた時、彼は新しい神を宣教したのではなく、旧約において期待された神の国が近づいたことを宣教したのである。イエスは新しい神の理念をもたらしたのではなくて、待望されていた国を告知したのである。そして彼は、待望されていたかの国の将来を、自身の言葉と行為によって現在化したのである。そしてイエスの死後、弟子たちは、イエスを神によって甦えらされた者として宣教した。道徳の教師や新しい宗教の教祖としてでなく、復活と生命としてキリストを宣べ伝えたのである。彼らにとって、神はなによりも「希望の神」だったのである。

注

(1) Moltmann, Jürgen: Theologie der Hoffnung—Untersuchung zur Begründung und zu den Konsequenzen einer christlichen Eschatologie, CHR. Kaiser Verlag S.138
モルトマン『希望の神学——キリスト教的終末論の基礎づけと帰結の研究』、高尾利数訳、新教出版社、一七一ページ以下。

(2) a.a.O. S.171
上掲書　二一四ページ。

(3) Moltmann: Gott in der Schöpfung-Ökologische Schöpfungslehre, Chr. Kaiser Verlag, S.200
モルトマン『創造における神——生態論的創造論』、沖野政弘訳、新教出版社、二八六ページ。

(4) a.a.O. S.66
上掲書　九〇ページ以下。

(5) モルトマン『神学の展望——現代社会におけるキリスト教の課題』、喜多川信・蓮見和男訳、新教出版社、八九ページ。

(6) 上掲書　一四一ページ。

(7) 上掲書　一三五ページ。

(8) モルトマン『キリストの未来と世界の終わり』、蓮見和男訳、新教出版社、三八ページ。

(9) 上掲書　二〇四ページ。

(10) 上掲書　二〇七ページ。

(11) 上掲書　二〇九ページ。

(12) モルトマン『二十世紀神学の展望』渡部　満訳、新教出版社、二四ページ。

(13) 上掲書　四一ページ以下。

(14) 上掲書　一七五ページ。

(15) モルトマン『現代における神』、堀　光男訳、新教出版社、一三六ページ以下。

(16) 上掲書　一三七ページ。